

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

『忘れられた日本人』で知られる宮本常一^{つねいち}は、とにかく歩きまわった人でした。郵便局員、小学校教師と職を転々とし、篤農協会やアチックミュージアムと関わりながら民俗学、漁業、農業、離島などの調査に携わった人です。生涯にわたって自分の足で調査をつづけ、宮本を見いだした渋沢敬三——渋沢栄一の孫です——が「日本列島の白地図の上に、宮本さんの足跡を赤インクでたらずと、列島は真っ赤になる」と語ったほど歩きまわった人でした。

中略

自分の足で歩いていくことは、人と出会う事であり、考える事、見つける事だと宮本は云っています。歩き、考えることが好きだったとも。誰もが文明の力を借りて、高速で移動している時代に、自分の足をつかって移動することは、その分、丁寧に物を考え、発見することになるのです。宮本の父親は、つねづね「先をいそぐことはない、あとからゆっくりついていけ、それでも人の見のこしたことは多く、やらねばならぬ仕事が一番多い」と、語っていたそうです。

急がないこと、自分のペースで生きていくというのは、なかなか難しい。

今はとくにそうですね。真面目な人ほど、焦ってしまう。急がざるをえない。けれども、急ぐということは、それだけ考えないということであり、見ないということでもある。その事になかなか、人は気づかない。

宮本常一は、肺を患っていて体調が万全ではなく、若い頃はたびたび故郷での療養を余儀なくされています。それもあってゆっくり生きていく、丁寧に生きることがせざるを得なかった。

けれども、そういう生き方をしたからこそ、他人よりも、一分、一秒でも早くたどりつこうと競争している人には見つけることが出来ない事象を発見し、メディアがつかまえる事の出来ない人と出会ったのです。

宮本の『忘れられた日本人』は、岩波文庫のなかでも、指折りのベストセラーで、アンケートでも夏目漱石の『こころ』と並ぶ人気を誇っているそうですが、この本はみんな彼が自分で歩いて、出会った老人たちから聞いた話です。一口に庶民と云い、古老というけれど、一人一人が小説よりもよほどドラマチックな人生を送っている。それを聞き取り、丁寧に文章として定着させることで、文豪の傑作と比肩するような作品を残すことが出来たのです。

歩くことは、大変だけれど、元手はそんなにかからない。別に遠くまでいなくてもいい。宮本常一の父親が教えたように、急いで先へ先へと進んでゆく人たちが見逃してしまうものを見つける、見て考える。

もちろん、誰もが急いでいる時代に、ゆっくりする事は難しい。

それでも、我慢してゆっくりしていれば、誰も気づかないものが見えてくる。

ゆったり生きることで、自分なりの風格を身につける事ができる。

大事なものは、ゆっくり生きるのには、生きるなりの知恵があるという事です。

後略

人間の器量 福田和也著 新潮新書より

(問い) 著者の主張に対するあなたの考えを、八百字以内で記述しなさい。